

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 12 Chet Baker【チェット・ベイカー】 ～永遠の不良&永遠のジャズ・ヒーロー～



写真提供：EMI ミュージック・ジャパン

Profile

1929年12月23日、米国オクラホマ州イーグル生まれ。本名は Chesney Henry Baker Jr.。幼少期をオクラホマシティで過ごし、40年にカリフォルニア州グレンデールに移住。13歳の時に父親にトロンボーンをプレゼントされたが、楽器が大きすぎたためトランペットに持ち替える。46年に高校を中退して陸軍に入隊し、軍のバンドで演奏。48年に除隊後、LAのエルク・カミノ大学に入り、ジャズ・クラブで演奏しながら和声や理論を学ぶ。50年から52年まで再び入隊し、除隊後一時的にヴィド・ムッソやスタン・ゲッツのバンドで活動後、LAでオーディションにパスし、チャーリー・パーカーのグループに参加。そして、ジェリー・マリガン、ピアノス・カルテットでの活躍により脚光を浴び、翌53年に独立し自己のカルテットを結成。54年にリリースしたアルバム『チェット・ベイカー・シングス』の大ヒットと共に、“ジャズ界のジェームス・ディーン”と称され不動の人気を獲得。55年には初の欧州ツアーに出る。57年2月に一時帰国するが、59年より再び欧州で活動。64年にイタリアから帰国し自己のグループを結成して活動を続けたが、60年代後期からはドラッグの影響もあり、目立った活躍はなく、また、そのドラッグが原因でダブルに巻き込まれ歯を全て失い、70年代前半まで演奏活動の休止を余儀なくされてしまう。だが、73年にディジー・ガレスピーの尽力により奇跡の復活を果たす。75年辺りからは主に欧州を拠点に活動を続けた。1988年5月13日、滞在中のオランダ、アムステルダム市の「オランダ・ビート・ホテル」の2階の窓から転落して死亡。転落の原因は不明…。享年58歳。ジャズ史に輝く名トランペッター & ヴォーカリストとして今尚高い人気を誇る。

ヴォーカルとトランペットの魅力とバランスが絶妙の人気盤



Sings & Plays

Chet Baker

(EMIミュージック・ジャパン:TOCJ-6811)

Chet Baker (vo, tp), Bud Shank (fl), Russ Freeman (p), Red Mitchell, Carson Smith (b), Bob Neel (ds), Corky Hale (harp, strings)

1. Let's Get Lost 2. This Is Always 3. Long Ago and Far Away
4. Someone To Watch Over Me 5. Just Friends 6. I Wish I Knew
7. Daybreak 8. You Don't Know What Love Is 9. Grey December
10. I Remember You

これぞウエスト・コースト・ジャズ全盛期のカッコ良さ！



The Route

Chet Baker/Art Pepper

(Blue Note : 92931 Import)

Chet Baker (tp), Art Pepper (as), Richie Kamuca (ts), Pete Jolly (p), Leroy Vinnegar (b), Stan Levey (ds)

1. Tynan Time 2. The Route 3. Sonny Boy 4. Minor Yours
5. Little Girl 6. Of Croix 7. I Can't Give You Anything But Love
8. The Great Lie 9. Sweet Lorraine 10. If I Should Lose You
11. Younger Than Springtime

“ジャズ界のジェームス・ディーン”たる所以がここに！



Theme Music From "The James Dean Story"

Chet Baker & Bud Shank

(EMIミュージック・ジャパン:TOCJ-9317)

Chet Baker (tp, vo), Bud Shank (as, fl), Charlie Mariano (as), Bill Holman, Richie Kamuca (ts), Pepper Adams (bs), Monte Budwig (b), Mel Lewis (ds), etc.

1. Jimmy's Theme 2. The Search 3. Lost Love 4. People
5. The Movie Star 6. Fairmont, Indiana 7. Rebel At Work
8. Success And Then What? 9. Let Me Be Loved 10. Hollywood
11. Let Me Be Loved [vocal version]

典型的破滅型ジャズマンと呼ばれて

1950年代半ばには、既にドラッグ漬けの生活を送っていたチェット。初の欧州ツアーから帰国後の57年にドラッグを断ち切るため療養所に入るも、59年にドラッグが原因で逮捕。その後再び欧州へ向うが、イギリス、イタリアでも逮捕され、64年に帰国してもドラッグと手を切れず、遂にはドラッグ絡みのトラブルで暴行を受け、トランペッターの命である歯を全て失うという絶望的危機に見舞われるが、デジー・ガレスピーの助けにより、73年に奇跡のカムバックを果たす。75年に再び欧州に向かい、謎の死を遂げるまでほとんどの時間を欧州で過ごした。その破滅型な生き様ばかりが先行しがちだが、チェットの歌声にインスパイアされたジョン・ジルベルトにより誕生したのが、ボサ・ノヴァだったと語られているように、ジャンルを超えてその影響力は絶大だった。尚、チェットの初来日は1986年3月で、翌87年にも再来日を果たしている。

チェットのヴォーカルとトランペットをフィーチャーした人気盤として知られるこのアルバム。「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」収録のアルバム『シングス』も有名だが、チェットの音楽と人生を描いたドキュメンタリー映画のタイトルにもなった「レッツ・ゲット・ロスト」がオープニングを飾り、チェットのハードなトランペットも聴ける本作も好きだ。ストリングスを加えたセッションとカルテットによる演奏の2つのセッションを収めており、全10曲どのナンバーにもチェットの魅力が聴き取れる。ジャケットのデザインもカッコ良く、ジャズマンの人気投票で、あのマイルス・デイビスを凌ぐほどの支持を集めていた1955年当時のチェットのクールなトランペットとソフトでアノニユイな歌声が聴ける傑作！

チェットとアート・ペッパー (as) がリーダーとなり、1956年7月26日に行われた貴重なセッションを収めた作品。当時のウエスト・コースト・ジャズ・シーンで若さとクールなルックスに加え、プレイでも絶好調と破竹の勢いだったチェットとアートの共演というだけでも価値は十分だが、リッチー・カミュカ (ts)、ビート・ジョリー (p)、リロイ・ヴィネガー (b)、スタン・リーヴィー (ds) と脇を固めたウエスト・コーストの名手たちの存在感も際立つ。チェットのトランペットが泣ける「スウィート・ロレイン」、リッチーのテナーが光る「イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー」など、最高にクールだったウエスト・コースト・ジャズ全盛期の記録を収めた快作。リロイのウォーキング・ベースも渋い！

1955年9月30日、愛車ポルシェ・550スパイダーと共に、24才という若さでこの世を去った俳優ジェームス・ディーン。彼の死を悼んで作られた映画『ジェームス・ディーン物語』で使われた音楽を“ジャズ界のジェームス・ディーン”＝チェット・ベイカーがジャズにアレンジして吹き込まれたのが本作。録音はジミーの死の翌年1956年11月8日。バド・シャンクとの共同名義となっているが、作品全体にチェットの存在感が強く感じられ、ジョニー・マンデル、ビル・ホルマンによるオーケストラ・アレンジも光る。ジャケットだけでも買いの一枚！尚、シングル用に録音されたチェットのヴォーカルによる「レット・ミー・ビー・ラヴド」は、盤によっては未収録のものがあるので要注意！

Let's Get Lost

チェットの映像作品を見るなら、その音楽と人生を描いたファッション・カメラマンのブルース・ウェンパー制作・監督のドキュメンタリー映画で、チェットが亡くなる直前に制作された『レッツ・ゲット・ロスト』がおすすめ！モノクロームの映像も美しい。

2度目の入隊

レスター・ヤングの逸話も有名で、ジャズ・シーンに限らず、嘗てはエルヴィス・プレスリーの入隊も話題になったが、チェットも10代後半(1946～48年)と20代前半(1950～52年)に2度の入隊経験がある。どちらの時か定かではないが、早く除隊したいたがために「男性用トイレに入れない」とホモセクシャルを装ったという。何とも破天荒というか、おどけた一面も持ち合わせていたチェットらしいエピソードではないか。